清水泰先生の人と学問

森本　茂

一

私はこれから清水泰先生のお話をするが、私は『堤中納言物語』などの平安後期の物語については専門外の領域であるし、また、私の立場から拝見した清水先生を語ることになり、どうしても私事にかかわる点もあるが、お許し願いたいと思う。

私が旧制立命館大学に入学したのは、終戦後まもない昭和二十二年四月のことで、その頃の日本は、精神的にも経済的にも、衣食住のすべてにわたって混乱を極めた、じつに厳しい時代であった。その頃、立命館大学の本部や文科系学部の校舎は広小路（京都御所の東）にあり、河原町通を距てた向かい側の京都府立医大の南側、今はある宗教団体の建物のある所に、木造の校舎が増築され、その両方で講義を受けた。その木造の校舎は簡素な二階建で、歩くと床がきしむ感じで、靴音が廊下に響いた。

当時、国文科の専任教授は、清水泰・後藤丹治・宮嶋弘の三先生で、漢文科に橋本循・白川静先生がおられた。清水先生は私たちの学年の担任教授として、学業や生活のこまかい事で、いろいろとお世話になった。

まず初めに、清水先生の履歴を御紹介する。

明治二十七年一月二十八日　山梨県北巨摩郡清哲村字青木に生る
同三十三年四月　清哲村尋常小学校入学
同三十七年三月　同校卒業
同三十七年四月　清哲村尋常高等小学校高等科入学
同四十一年三月　同校卒業
同四十四年四月　山梨県師範学校入学
大正四年三月　同校卒業
同四年四月　東京高等師範学校文科第二部入学
同八年三月　同校卒業
同八年三月　山形県立山形高等女学校教諭兼山形県女子師範学校教諭

同十年六月　京都府女子師範学校教諭兼京都府立桃山高等女学校教諭
同十一年四月　京都帝国大学文学部文学科入学
同十四年三月　同校卒業
同十四年四月　京都帝国大学大学院入学
同十四年四月　立命館大学予科講師
昭和三年四月　立命館大学予科教授兼専門学部講師
同十六年四月　立命館大学教授（昭十九・四～二十・十一月、文学部長就任）
同三十一年四月　立命館大学専任講師
同三十四年三月　同校定年退職
同三十四年六月　立命館大学名誉教授
同三十七年　京都大学より文学博士の学位を授与さる
同四十四年九月十三日　京都市左京区田中野神町二十の自宅にて逝去　七十五歳

私が先生に教わった昭和二十二年頃は、先生五十三歳の頃であった。その時までに先生は、『堤中納言物語』『住吉物語』『方丈記』や小野小町・清少納言など、中古から中世へかけての物語や歌人などに関する著書・論文を発表しておられたが、中でも『堤中納言物語』の御研究では第一人者で、私たちも講読で『堤中納言物語』を教わった。

ここで、先生の御著書を御紹介する。

校訂異本堤中納言物語　龍谷大学国文学会（昭和三年四月）
堤中納言物語評釈　文献書院（同四年九月）
校註方丈記　平野書院（同七年二月）
増訂堤中納言物語評釈　立命館出版部（同九年六月）
保元物語太平記選釈　日本文学社（同十年十一月）
平安朝物語選　白帝社（同十一年一月）
堤中納言物語　白帝社（同十二年十二月）
堤中納言物語詳解　要書房（同二十九年六月）
堤中納言物語　弘文堂（同三十年五月）
曽我物語（万法寺本）上・中・下　古典文庫（同三十五年、五、八、十二月）
日本文学論考　初音書房（同三十五年六月）

先生は、「国語国文の研究」の昭和四年十一月号に「堤中納言物語私考」と題する論文を書かれ、そこで『堤中納言物語』十篇のうち「よしなしごと」の中の、「わが世や近くとながめくらすも」の引歌は、藤原知家（嘉禎四年―一二三八―五十七歳の時出家）の「そむくべきわが世や近くなりぬらむ心にかかる峯の白雲」（続古今集・雑歌下・一八二五・洞院摂政家の百首歌）であるから、この篇は鎌倉期の成立である。次に、「はなだの女御」の中の、「たれそまやまをとばかりほのかにいひて」の引歌は、藤原重通（長承三年―一一三四―から保延七年―一一四一―まで宰相中将）の「たれたれぞたれ杣山のほととぎすうはの空にはいかが名のらむ」（今鏡・第十）という歌であるから、この篇は崇徳・近衛朝以後の成立である、とされた。この御発表は、一般に『堤中納言物語』の成立

は、全篇平安後期と考えられていたので、貴重な物であった。

この論文内容を取り込み、この物語に注釈を施されたのが、『堤中納言物語評釈』（昭和四年、文献書院）であり、名著の誉れ高く、市古貞次編『国文学研究書目解題』（東京大学出版会）にも、「『堤中納言物語』の最初の本格的な注釈書として先駆的意義を有する」と紹介されている。本書に有職故実の図版を多く取り入れてできたのが、『増訂堤中納言物語評釈』（昭和九年、立命館出版部）であり、その復刻版が、昭和二十三年、京都印書館から出ている。そして、本書に新資料を加え校異を増補したのが、『堤中納言物語詳解』（昭和二十九年、要書房）である。『増訂版』を見ると、「本文」は漢字にルビが多くつけられ、「通釈」は平易なことばで訳され、「語釈」は多くの語句を取り出して分かりやすく説明してある。全体に先生の良心が隅々にまで行きわたった感じがする。

私がここに持ってきた物は、かつて先生に講読を教わったときのテキストで、奥付に昭和二十三年八月十五日発行とあるから、復刻版である。おそらく『増補版』が絶版になっていたので、講読用に増刷されたのだろうと思う。私はこれを昭和二十三年九月十六日に、一八〇円で購入している。当時の装丁はひどく傷んでしまったので、数年前、大阪の古書店所属の装丁修理の専門家の手で、装丁をやり直してもらった。

清水先生の講義は流暢というのではなく、むしろ訥々とゆっくり話される方であったが、そこに言うに言われぬ滋味があり、生活の慌しさを一時忘れて、物語文学の世界を彷彿とさせる雰囲気があった。先生のお人柄は温厚で暖かく、慈父のような感じで、先生が不機嫌な顔をされたり、怒られたりされたのを見たことがなかった。ちなみに、当時の私たちの学年は、終戦後まもない頃であったから、さまざまな階層の人がいて、復員兵はまだ軍服のような物を着ていた。年齢もさまざまで、同学年でも上下二十歳ほどの開きがあった。林屋辰三郎先生から「古文書学」を教わったが、当時の先生より年上の学生も何人かいたくらいである。そんなわけで、学生同志の生活体験や学力に大きな差があり、先生方はさぞ困られたことだろうと思う。

清水先生以外の講義としては、後藤先生から『六代勝事記』『滝口入道』（高山樗牛）など、宮嶋先生から文部省の「口語文法」の教科書による文法論、橋本先生から「中国文学概論」、白川先生から亀甲文字などについて教わった。

二

さて、私たちの学年には、皆様もよく御存知の土岐武治さんがいて、清水先生のもとで『堤中納言物語』を精力的に研究し始めていた。その土岐さんあたりが推進力となって、「平安文学研究会」を結成し、清水先生を会長に拝ぎ、昭和二十四年九月には、「平安文学研究」という研究誌が創刊された。その発行人は清水先生で、発行所兼編輯所は立命館大学文学部内に置かれた。当時、学会や研究会らしい物は、まだほとんどない頃であったから、こ

の研究会の意義はじつに大きかった。その研究誌の表紙の「平安文学研究」という文字は、清水先生の直筆であるが、まことに伸びやかな達筆である。

この研究誌はだいたい年二回刊行され、昭和二十六年から編輯委員は、清水先生と三木幸信・宮田和一郎・吉田幸一・松村博司・田中重太郎の諸先生となり、名実ともに全国的な規模に発展して行った。それから四十年近く続き、昭和六十三年十月、第七十九・八十輯合併号をもって終刊となった。その間、昭和四十一年には、この研究会を母胎として、今の「中古文学会」という全国的な学会が創立された。「平安文学研究」創刊号の「発刊のことば」で、清水先生は、「立命館学舎の所在地こそ、藤原道長が栄華の夢を結んだゆかりの地であり、ここを本拠として平安文学研究誌が発刊されたことは、意義深いものがある」と述べておられる（当時の立命は広小路にあり、その付近に道長の法成寺があった）。

大学制度が旧制から新制に切り換り、立命館大学日本文学科の活動も活発になり、ついに昭和二十九年七月、「立命館大学日本文学会」が結成され、研究誌の「論究日本文学」が創刊された。学会の委員長は、当時助教授であられた和田繁二郎先生であり、顧問に清水・後藤・宮嶋先生がなられた。

その「創刊のことば」の一節に、「日本文学科においては、かねがね日本文学専門の学会を組織し、機関誌をもつことを企画しつつあったが、時たまたま、主任清水泰教授の還暦を迎えるにあたって、それを記念するとともに、かねての願望を実現させることとなったのである」とあり、創刊号が「清水先生還暦記念号」でもあった。それ以来、今年五月に第六十号が刊行され、ますます発展している。そして、第十一号が「清水泰先生退職記念特集号」、第二十三号が「清水泰先生古稀祝賀記念特集号」として刊行された。

以上のように、清水先生は、立命館大学日本文学科の内外にわたって、学会の活動に大きな貢献を果してこられた。

私は昭和二十五年三月、立命館大学を卒業し、故郷の丹後に帰って府立高校に勤めたが、まもなく京都近郊の府立高校に転勤し、昭和二十八年、立命の大学院（新制）に入り、『源氏物語』の修士論文を書くのに当って、再び清水先生のお世話になった。大学院を終えてまもない頃、ある日、先生からお葉書をいただき、『〇〇』の本に君の論文がかなり詳しく紹介されているから見るように、とのこと。私は早速その本を購入した。先生は研究書をよく見ておられ、教え子のことがあると、すぐ連絡して勇気づけて下さった。先生は鷹揚で、悠々迫らずという気風をお持ちで、すぐれた教育者でもあった。

「論究日本文学」が創刊された昭和二十九年、先生は「平安文学研究」第十五輯の「巻頭言」に、「花と本」という随筆を載せておられる。当時、先生は六十歳であったが、この随筆を拝読すると、先生がいかに学問を愛し、自然を愛し、御家族を愛しておられたかがよく分かり、名文だと思う（巻末に「花と本」の全文を転載させていただいたので、御覧願いたいと思う）。

三

次に、先生の学術論文集の中の『日本文学論考』について、お話したい。これは、昭和三十五年、京都の初音書房から出版された。その後記に、「昭和二十四年から同三十四年までの約十年の間に書いたものの中から未発表のもの、すでに雑誌などに発表したものなどとりまぜ五篇をとって、ここに出版することにしました」とある。

本書の内訳は、「継子物語の研究」「奈良絵本考」「土佐日記の女性仮託説を排す」「平貞文（平仲）伝の一考察」「堤中納言物語における笑い」の五篇からなり、中でも「継子物語の研究」が全体の約三分の二を占めており、そこに主眼がある。それは、平安時代の『宇津保』『大和』『源氏』『今昔』『落窪』、鎌倉時代の『住吉』『小夜衣』、室町時代の『鉢かづき』『姥皮』『花よの姫』『伏屋物語』『岩屋の草子』『秋月物語』『一本菊』などを通して、継子物語の実体が具体的に詳細に述べられている。

私は継子物語について、先生の業績を御紹介する力がないが、一般によく知られる『源氏物語』の源氏の場合について、その一節を御紹介しておく。「源氏物語における継子物語の要素」という項である。その中に、次のようにある。

男系の男子が相続する家族制度では、継子が男子である時は、後妻に子供があろうと、それが男の子であっても、死んだ先妻の子の男子が、父のあとをつぎ、後妻はただあるのみで、継子いじめの物語というのは、継子が男子であってほしいと思われる。しかるに継子型物語では、先妻の子は女の子となっている。ここに理性よりも情趣を重しとするわが国の物語の特質を感ずるのである。

ここでは、継子が女の子である点に、日本らしい特質（情趣重視）をみておられる。さらに、それに続いて、

『源氏物語』の源氏は継子であるが、男子である。その継母は、藤壺ではなく弘徽殿女御と考えたい。ところが、源氏は継母に苦しめられるということはなく、左大臣方の人々と共に、順調に栄達し、花やかに世界をもっている。（以上概略）

けれども源氏物語の記述は、決して弘徽殿の女御が源氏を憎んでいないのではない。ただ普通の継子型物語に見るような筋の運び方にしたがって、意地悪い憎み方の記事がないだけである。源氏物語の作者紫式部は、腹ぎたない継子物語は十分読んでいたろうし、当時の世間の例も知っていたであろうが、そのようなことは、この物語にはわざとさけて書かなかったまでであろうと想像される。

ここでは、継子物語について、『源氏物語』の源氏の場合の特異性にふれておられる。そして、このあとで、「作者が腹ぎたない継母の描写などを好まなかった考えから来ているのであろうと思われる」と結んでおられ、作者紫式部の意識にまでふみ込んで考察しておられる。

四

私は歌物語のことを主にやっているので、その関係から、「平貞文（平仲）伝の一考察」という篇は、特に『平中物語』を研究する上から、意義のある論文である。じつはこの論文は、昭和二十四年十一月、「立命館文学」に発表された物である。次に、この論文の内容を具体的に紹介して行く。

改めて申し上げるまでもないが、『平中物語』は、在原業平と並ぶ好色者の平貞文を主人公とした、平安朝の歌物語の一で、その写本が発見されたのは昭和初年である。その写本は静嘉堂文庫に所蔵されており、冷泉為相卿筆と伝える。この写本の発見は、昭和六年十一・十二月号の「国文学誌」に、川瀬一馬氏が「大和物語の異本と平中物語の発見」という論文で紹介された。『平中物語』はこの写本が唯一の物である。

そこでまず問題になったのは、その写本の題簽に「平仲物語」とあるが、それは、鎌倉末期の成立といわれる『本朝書籍目録』仮名部に「平中日記一巻」とある物と同じ物と考えられ、書名の「平仲」「平中」のどちらが正しいか、ということである。「平」は平氏のことである。「仲」は兄弟順を「伯仲叔季」というように、兄弟の中の二番目の者をいう。そこで、貞文は好風の弟だから「平仲」だという説がある。一方、貞文は中将であったから「平中」だという説もある。先生の論文はその点についての物である。

早く幕末の学者黒川春村は、貞文は中将であったとし、川瀬一馬氏も『躬恒集』に「平中将の家の歌合に初の春」とあるのに拠って、貞文は中将であったとして、「平中」説を述べられた。清水先生の論文はこれを否定しておられる。

その根拠は、(1)貞文の伝記を記した物の中で、『古今和歌集目録』『尊卑分脈』『作者部類』『中古三十六人歌仙伝』『拾芥抄』などや、『大和物語』『今昔物語』にも貞文が中将であった記載はまったくないこと、(2)貞文は従五位上が最高位であるが、中将は従四位下相当であり、貞文が中将になれるはずはないということ、(3)川瀬氏の示された『躬恒集』の、「平中将の家の」云々という詞書をもつ写本は一系統だけであり、他の系統本には「定文が家の歌合に」などとあって、「平中将」とは書いてない。その「平中将」の部分は、後人のさかしらによって書き加えられた物とみられる。以上の三点によって、「平中」説を否定された。

そして、『三代実録』の貞観十六年十一月二十一日条に、「件好風貞文二人、賜二姓平朝臣一、永停レ給レ禄」とあるのによって、貞文は好風の弟であるから「平仲」だとされた。この好風の弟説は、すでに契沖が『古今余材抄』巻五の「平さだふん」の項で述べていた物だが、先生はそれを支持されたわけである。ところが、『古今和歌集目録』は貞文を「好風一男」とし、『中古三十六人歌仙伝』『拾芥抄』は「好風男」とし、『尊卑分脈』も好風の子としている。先生はそれらの記述は、「みな誤りと見なさるべきである」とされた。あの温厚な先生も、自説は大胆に主張されるのだ、

と認識を新たにした。しかし、残念ながら、「好風貞文二人」は、親子でもいいうるわけであり、この兄弟説は今は影をひそめている。けれども、初めの「平中」説の否定はまったくその通りだと思われ、今は貞文中将説は顧みられなくなった。ちなみに、『尊卑分脈』によれば、平氏系図では好風の子は貞文一人であるが、藤原山蔭の子の永頼の母に「平好風女」とあるから、女の子もあったらしい。しかし、男の子は貞文以外には見当らない。

ところで、この論文には後日譚がある。それは、先生がこの論文を、昭和三十五年に『日本文学論考』の中に収めるに当って、この篇の末尾に、「追記」として次のように書いておられる。

好風と貞文とは兄弟であった。が好風は貞文の養父ともなったとしてはどうだろう、今の世にいう順養子の関係である。

養い親の事は大鏡実頼伝にその例は述べてある。

おそらく先生は、好風・貞文兄弟説を支持したが、『古今和歌集目録』『尊卑分脈』などに親子とあるのが、ずっと心の隅に残り、それから十年たったこの時期に、それらの記事と自説との整合性を求めて、順養子説を考えつかれたのであろう。その是非はともかくとして、ここに先生の絶えざる学究の精神がみてとれると思われた。

先生は、昭和四十四年九月十三日午後三時三十分に逝去された。先生の奥様はその日から十五日朝まで昏睡状態に陥られたそうで、そのお悲しみがどんなに深かったか、お察しできる。先生の密葬は、九月十五日、折から残暑の厳しい日に、田中野神町の御自宅でしめやかに取り行われた。

五

清水先生のお人柄については、「平安文学研究」第四十三輯に特集された「清水泰博士をしのぶ」という追悼文で、多くの方々が述べておられるので、次に、特に先生のエピソードなどにふれてある文を引用させていただく（氏名の下の括弧内は清水先生との御関係を表す）。

兄の思い出　　坂本近一氏（実弟）

両親共に教育には関心が深く、父はよく二宮金次郎のことを口にして子供達を戒しめたが、頑固の所もあって、その躾はかなり厳しいものであった。毎朝の掃除は我々の日課で、寒中でも朝飯前に炬燵へあたることは滅多に許さなかった。ところが兄が高等小学校へ通っていた頃のある寒い冬の朝、分担の掃除を済ませて、兄が珍らしく炬燵で暖をとっていたところ、父がそれを発見して咎めた。兄はこんな寒い朝に何をと思ったのか、平然と構えていたので、父は重ねて注意したが、矢張びくともしなかったので、立腹した父はいきなり兄の襟首を摑んで無理に引き出そうとしたが、兄は炬燵にしっかりしがみついて離さなかったので、遂に炬燵諸共浮き上って部屋中の大騒動になって了った。

清水君の追憶　　山岸徳平氏（東京高師の一年先輩）

松井簡治先生は、「本の好きな者は、又、読むのも好きなものだ」と言はれた。それは水上君（注、清水先生の旧姓）にも当て

はまる言葉である。君が毎朝、蹴球部の室を出て教室へ行く時は、池の岸に沿うて、小さな坂を早足でちょこ〳〵歩いて行った。その姿は、今でも目に浮ぶ。漢文大系の四書とか詩経とか左氏会箋とか荀子など、その時々の教科書を小脇にかかへて往返する。…とにかく、水上君も石田君（注、石田茂作氏）も、鷹揚迫らず、どこか大人の風格を備へて居た。家庭の教養が、然らしめたのであらうか。

清水泰博士の思い出　石田茂作氏（東京高師の二年先輩）

私が夕食後毎夜図書館に通って仏教図書を次々と借り出して図書室の一隅で書見していると、反対の一隅に物静かに本を見ている人がある。そういう夜が度々つづいた。ある時その君に対して話しかけたところ、予科一年生で、私と同じ国語漢文専攻といふ。以来時々話をかわすようになり、予科から本科になる時も、運動部をどこにしようかと云う相談をうけ、では僕の居る蹴球部の寮へ来ないかと云って、爾来二年間君と机を並べて暮すことになった。そうした事から日曜日など郊外に散歩することも多く、或る時は千葉県香取まで遠出して十時の門限に遅れ、二人して塀をのり越えて寝に就いた思い出もある。

清水泰先生の思い出　玉上琢彌氏（京都大学の後輩）

旧制の学位制度がなくなるので、わたくしなどまでが論文を提出し、さいわいに審査を通って学位記授与式の日になった。最後の日とあって、大変な人数であり、他学科の辱知諸氏に久しぶりに挨拶したり、国語国文関係が集まって遠藤野間両主査をかこんで一席をもうけたり、にぎやかなことであった。清水先生もおいでのはずだのにお姿が見えない。あとで大阪国文談話会の席であったかお目にかかったとき伺ったら、日を忘れていました、と笑っておられた。大物は違うと感じ入ったことである。

清水先生と松平文庫行　目加田さくを氏（「平安文学研究」編集委員）

福岡で平安文学研究会を催しました折りには、あの御愛用の御鞄をおさげになり、うすねずみ？色のソフトを御召しになって、御参会下さいました。研究発表会が終り、一行三十数人で島原の松平文庫見学に出かけました。…あとで、事務整理を致します折に、学生の一人が、参会者名簿を御一人〳〵指さして、何とか彼とか記憶をたしかめていましたが、「清水泰先生！　やさしいおじいちゃま」と大声で申しました。文庫見学中も、大変御熱心に御覧でしたので、「お年を召しても、学問に対して彼の執念をもってらっしゃる御姿は、素晴しいですねえ」と会員の川瀬嬢がしみじみ申したものです。

思い出すままに　槇野広造氏（立命大の教え子）

御連絡を受けて、先生の宅へ伺いましたのは、たしか上島・小島の両先輩に私でございました。「ある出版社から頼まれてね」とそうした新しい時代に即応する小型国語辞典の編集の御依頼が先生の御用件でした。…「出版社の都合で、誠に申訳ないが」執

筆の中止を突然おっしゃいました。出版社にどういう事情があったのかはわかりませんが、それを先生は御自分の胸にふくまれて、われわれにはひたすら「申し訳ない」を繰返されるのです。お聞きしているわれわれの方が申し訳なく思うくらいでございました。その年の末に近いころでした。先生は「出版社から執筆料を出させたよ」とおっしゃって、かなりの料を下さいました。しかし、出版社が出したなどとは、到底考えられないことでございました。先生はそういうお方なのでございます。

花と本　　清水　泰

小高い築山の正面にすえられた庭石を、被いかくすように、のびはびこってつつじの花が咲き出した。以前はここに松があったのだが、戦時中虫にやられて枯れたあとは、まともに陽をうけて、つつじの花が我がもの顔に咲き誇り、今年は殊さら花が多くつきすぎて、紅紫の色は少々どぎつい感じがする。先ごろまで咲いていたぼけはちんまりとした実をつけてきたし、沈丁花は花の名残さえ見せず若々しい青葉の落着きを見せて来た。はるかに塀をこえて高々と咲いていた木蓮も散ってしまったし、庭すみに咲き乱れていた山吹も、真白いふくよかな花を見せてくれたいちはつも、もう盛りをすぎてしまった。そのかわり、信州の山からもって来たたけのひくいおだまきが、うす紫の花をつけて初夏らしい新鮮さをたゞよわしているし、木かげに芽を出した鈴蘭は、ひとつひとつ花茎をいだいた巻葉が日毎にのびてゆく。

さして広いという程の庭ではないが、気の向くまゝに移し植えた草木の花が、次から次へと咲きかはり、こゝろよい四季の喜びを私に告げ知らせてくれる。

日本桜草の幾鉢かが、いま、とり〴〵の花を咲かせているが、ゆっくり水をやる暇もないこの頃のいそがしさを心残りに思っている。

梅雨の頃になるときまって咲きはじめる紫陽花、紫のあやめといちはつの花。それが過ぎる頃には為朝ゆりに鉄砲ゆり、山百合に鹿の子百合、ダリヤの花は次々に咲き出すし、白いくちなしの花が快い香りをたゞよわせてくれる頃には、見上げて高い泰山木のいたゞきに、大らかな花をのぞかせて、行いすました尼僧のように清らかに咲き静もっている。

つゆ草は朝一時の命ではあるが、夏の朝のすが〴〵しさをささやくが如くに、濃紫の小さい花を一ぱいつけて、起きぬけの私の目をたのしませてくれる。

夏の暑さを精一ぱい吸いよせたかのように赤々と燃えだすさるすべりや莢竹桃の咲く頃は、猿股ひとつで庭の水まきもまたこころよいものの一つである。

サルビヤと秋海棠は、夏から咲き出して晩秋の霜に打たれるまで、二つの異なった赤さをきそうかのように咲きつづけている。

外出から帰って先ず目にふれるは芙蓉の花。

菊はひところ熱心のこともあったが、この頃は秋口になって、申し訳ばかりの花を見るだけ。この家に越してきた年、夜店で買った一尺足らずの山茶花が今はもう私の背たけよりも大きくなって

どっさりと蕾をつけ、寒い冬の間を毎日散って咲き、咲いては散り、雪をかぶってもなお赤く愛らしく咲いているのはしおらしい。たしか長塚節の鍼の如くのなかに、

山茶花は咲けばすなはちこぼれつついくばく久にあらむとすらむ

という歌があったように記憶しているが、それはきっとこの獅子頭のことであろうなどと思う。数えてゆけばきりがない。床の間に活けて楽しむ茶の花、花が咲けば部屋に持ちこんで眺める蘭の鉢。まっ先に春を告げる蕗のとうに梅の花、連ぎょうの黄色い花が咲く頃になると、さすがに春の陽ざしが温くなってくる。

うちの庭は私の書斎と同様に少し草木が多すぎると妻がこの頃言い出した。家中のものが本が好きで花が好きで、本を買い、花を植えることが何よりの楽しみであったが、この頃もう本をおく場所も花を植える場所もなくなったというのである。

小さかった子供達もいつしか大供になって、小銭ならぬ大銭が学資その他のことにどか〳〵と出てゆき、なか〳〵本を買うゆとりがないと時々私がかこつのを聞いて、学者というものは、これだけあってもまだ本が欲しいのですか、とあわれむように、いとおしむように、感心したように、そしていさゝか皮肉もまじえて妻は歎息しているが、本を積み重ねる畳はまだあいているし、多少陽あたりは悪くとも、まだまだ庭の土もあいている。

（昭和二九・四・二八）

（「平安文学研究」第十五輯・巻頭言）